

成り済ます

陽羅 義光

ドストエフスキーの小説のポイントの一つは「成り済まし」である。
【ぼくは『貧しい人びと』では自分の顔は見せませんでした】とドストエフスキーは云っている。

（優れた小説家ほど嘘つきだから鵜呑みにはできないが）それは自分のことは語らず、中年官吏の生態を観察して報告したという意味ではなく、『貧しい人びと』という仮想の劇を演じ、主人公に成り済ましたのだ、という意味である。

また『悪霊』の主人公の冷酷さ。

絶望にうちひしがれた少女が自殺しようと物置に駆け込んだあと、主人公は窓辺の椅子に座って時計で、正確に時間を見定めながら待っていた。

主人公の自殺は、釘が折れたときのために予備の釘を用意し、紐にも石鹼を塗って皮膚を傷つけないようにしているほど、冷静そのもの。

作家が主人公に成り済まさなければ、こうした冷酷さも冷静さも出ては来ない。

なおかつドストエフスキーの場合は、作家が主人公に成り済ましたと見せかけて、作家の正体を告白するということもあるから一筋縄ではない。

その一筋縄ではないのが「成り済ます」ということで、太宰治がよくドストエフスキーに似ていると云われるのは、この「成り済まし」のやり口が似ているからなのである。

「成り済まし」、別称「憑依」。

もちろん憑依と成り済ましとは、本質的なところは違う。

憑依には客観性がほとんどないが、成り済ましには恐ろしいほどの客観性がある。

作家と作品（これは絵画制作や作曲活動にも通ずるのだ）の間に流れる暗い河の秘密はここに在るのであって、そこを意識認識さえすれば、平板な自分史小説や日常雑記風な私小説を書かずに済むはずだ。

スタンダードやフローベールなどの翻訳でも著名な、生島遼一のエッ

セイにこんな言葉がある。

【作家は、えらい作家は、決して事実そのものを書かない、というのが私の信条だ。材料にした事実や自己体験をどのように変形したか、その mutation,transmutation のしかた、ここにこそ文学の根本的な問題がある、私には常にそう思われる】

成り済ましは、(もちろん憑依も) 生島遼一云うところの、「変形」の一種である。